

佐伯神楽について (其の三)

三八

正田泉

三二、華の割手 (はなのわりて)

左足を前に出し二踏。右足前出一踏。左足後引一踏。右足二踏。左足前一踏。右後に一踏。左二踏。右足一踏。此時鈴を高く一振して、次に右足を後に引きて膝突をする。此間すべて鈴拍子十二振であります。

三三、膝突 (ひざつき)

本手入座、魔袂、玉串、御弓、神遊、御華等の中に用ひられている動作であります。そして右膝突左膝突とあります。右膝突は右膝を座上に突きて右足を爪立て其の踵の上に右臀部を据える状態。左膝突は左膝を座上に突いて左足を爪立て其上に左臀部を据える態であります。尚膝突いて廻るのを膝回転と称しています。

三四、背合 (せあはせ)

本手奥手の玉串の中にある姿勢であります。

本手奥手の玉串の後下段中抱合三度の膝突了るや、相手方と互に膝回転にて背合となる。玉串は持手にて垂直であります。

三五、両隅追廻 (りようおひまはし、ななめおひまはし)

二人追廻ともいふ。

本手奥手の御弓、全長刀及び神遊の中なる手振であります。

先づ二人結手の転突で正面し之から順追廻に入る。

一郎は左手採物を振廻さないで第一隅に於て右五廻して第三隅に面し、転突で二郎の右側を通りて第三隅に進行此間鈴拍子十五振。二郎は一郎の動作と同時に左手採物を振らないで第三隅に於て右五廻りして第一隅に面し、転突にて一郎の右側を通り第一隅に進む。此間鈴十五振り。二郎は一郎と全時に第一隅に於て右五足廻して第三隅に面し転突にて一郎の右側を通り第一隅に進む。此間鈴十五振。之で順の追廻を了り逆の追廻しにかかる。即ち一郎は第一隅に於て左手の採物を振廻しつづ（第三隅よりてんつくで進んで来た終りの一動）。左五足廻りして第三隅に面し、転突にて二郎の左側を通り第三隅に進む。此間十五鈴。二郎は一郎と全時に左手採物を振廻しつづ（第一隅より進んで来た順追廻しの転突の終りの一動作の時左外方から右内方に採物を振寄せる）。左五足廻りして第一隅に面し転突にて一郎の左側を通り第一隅に進む。此間鈴十五鈴。次に一郎は第三隅に於いて左五足廻りして（左手採物の取扱方は一隅に於ける逆追廻しの通り）。転突にて第四隅に進む。此間鈴十五振。之より結手後半に入る。御弓、長刀の追廻はしに於ける二郎の逆追廻しの通り）は左手の採物は振らない。

三六、搔込構（かいこみかまへ）

長刀神楽に用ひられる手振で右込構と左込構とがあります。

右込構は長刀の穂を前方斜下に刃を上に向けて柄の中央を右手に握り、其の中央から右突に近い方を右腕腋に搔込む構。左込構は長刀の穂を前方斜下に刃を上に向けて柄の中央を左手に握り、其の中央から右突に近い部分を左腋に搔込む構。用いない手は、すべて拇指を後に四指を前にして腰側に当てがいます。

三七、矢払構（やばらいがまへ）

長刀の中にある手振で、右構と左構とがあります。

右矢拵は長刀の中央部を左手に（手の甲を下に向ける様にして）とり、穂を斜前左下に（刃を外方に向ける様に）なる様にし、柄の中央から石突に近い部分を右手に（手甲を上になる様に）握りて構へる。

左矢拵は長刀の中央部を右手に（手甲を下に向ける様にして）とり、穂を斜前右下に（刃を外方に向ける様に）なる様にし、柄の中央から石突に近い部分を左手に（手甲が上になる様に）握りて構える。

三八、矢拵（やばらい）

矢拵も長刀神楽にのみ存する手振で、之に右矢拵と左矢拵とがあります。

右矢拵は右矢拵構の手振から入り、右思案足の動作に任せて長刀を扱ふのであります。

先づ右思案足の右足を前に出して踏みつける時、石突の方を少しく前方に押傾け、次に右足を後に引いて踏みつける時、石突が右上から右側下方に大輪を画いて振寄せられ、次に右足を前に出して踏みつける時、石突が前下から左上方に振上げられ、而して右上から左側下に大輪を画いて振捌かれます。次に又右足を後に引いて踏みつける時、石突が前下から右上に振上げられ続いて右側下に大輪を画いて振寄せられる。此の如く石突の右側振寄せと左側振捌との手振が右左、右左右左と五度繰返され、五度目に左側で振り留めるのであります。尚右矢拵の場合、石突の方を右上より輪を描いて右側下に振寄せの時は、左手の下近くに右手を押添へて廻はし、石突の方を左上より輪を描いて左側下に振捌く時は左手の上の方近くに右手を添へはねて廻はす。又左矢拵の場合、石突の方を左上より輪を描いて左側下に振寄せるとは、右手の下近くに左手を押添へて廻はし、又石突の方を右上より輪を描いて右側下に振捌く時は、右手の上近く左手を添へはねて廻はすのであります。

三九、風車（かざぐるま）

長刀と御劔神楽の中に此の手振があります。が、長刀の方は拍子は早く、御劔の方は稍遅くせねばなりません。而して長刀の方には左廻し風車と、右廻し風車とがあります。

長刀左廻し風車

先づ長刀の柄の中央部を右手に穂を上にしてとり、(手甲が右側に向く様)之を左に倒すとともに、左手を以て握つて居る右手の右方近くの柄を、手甲を上にしてとる。次に右手の握りを放ち、左手を左に振ち、其の左手の手甲が下になる様握つた所の近くの右方の柄を右手で手甲を下にして採る。次に左手の握りを放ち、直に握つて居る右手を左に振ち、其の右手の手甲が上になつて振られて居る所の近くの右方の柄を左手で手甲が上になる様にして上から採る。此の如くして、手振を繰返し、風車のめぐるが如く、長刀を左廻はしに廻します。

御劔の風車も手振は左廻はしであります。

長刀右廻風車

之は長刀の本手奥手にのみある手振であります。先づ長刀の柄の中央部を左手に穂を上にしてとり(左手の手甲が左側に向く様)之を右に倒すとともに、右手を以て、握つて居る左手の左方近くの柄を手甲を上にしてとる。次に左手の握りを放ち、右手を右に振ち、其の右手の手甲が下になる様握つた所の近くの左方の柄を左手で手甲を下にしてとる。次に右手の握りを放ち直に握つて居る左手を右に振ち、其の左手の手甲が上になつて握られて居る所の近くの左方の柄を右手で手甲が上になる様にして上から採る。此の如くして手振をくりかへし風車のめぐるが如く長刀を右廻はしに廻します。

四〇、袖巻(そでまき)

これは御華神楽の中にある手振で、右巻、左巻の二通りがあります。

右巻。右思案足の終足を右に引く時に両袖を右巻する動作でありますが、

即ち左足を上げて踏み、次に右足を左足の前に出し踏みつける。此の時、右手玉串を上、左手玉串を下にして交叉に振る次に左足を上げて踏みつける。次に右足を後に引きて踏みつけ、次に左足を上げて踏みつけ、次に右足を左足の前に進めて踏みつける。此時も亦右手玉串を上、左手玉串を下に交叉に振る。次に左足を上げて踏みつける。次に右足を後に引く

と全時に右袖を右腕の下方より左を通らして右上に巻き、次に左袖を左腕の下より左上に通らして右方上に巻く、其の時左腕は左方眼の高さに捧げられ、右腕は右方乳の高さに支へて而して左方に押廻はし一まはりして正面にもどり、袖を解く。

左巻。左思案足の終足左足を引く時に両袖を左巻する動作でありますが、

即ち右足を上げて踏み、次に左足を右足の前に出し踏みつける。此の時左手玉串を上、右手玉串を下、交叉に振る。次に右足を上げて踏みつける。次に左足を後に引きて踏みつけ、次に右足を上げて踏みつけ、次に左足を右の足前に進めて踏み下す。此の時左手玉串を上、右手玉串を交叉に振る。次に右足を上げて踏みつける。次に左足を後に引くと全時に左袖を左腕の内方下より上左に巻き、次に右袖を右腕の外方下より上左に巻く。次に右腕を右方眼の高さにさゝげ左腕を左方乳の高さにさゝへて右押廻しをして、右面舞の位置にうつりて、両袖の巻を解く。

四一、杵搗（きねつき）

神遊神楽にある手振であります。

先づ翁、右膝突をして、杵の中央を左手に採り（手甲が外部になる様に）、右手の平を杵頭にあて添へ、テン〇テン〇テンテンテン〇テンと太鼓拍子で拍子を取つて六つきに搗く。次に起上り、杵を一振して持ちかへ、左膝突して右手で杵の中央をとり（手甲が外部になる様に）、左手の平を杵頭にあて添へ、テン〇テン〇テンテンテン〇テンと前の如く拍子をとつて六つきに搗く。次に又起上り、杵を一振して持ちかへ、右膝突をして左手に杵の中央をとり、右手の平を杵頭にあてがひ、テン〇テン〇テンテンテン〇テンと亦前の如く拍子を取つて六つきに搗きて起上る。

媼は、翁と向合になつて、翁の動作の如く膝突をなし、之に拍子を合せつゝ翁が杵を搗く時、御幣と鈴とを斜上から下に動かして拍子を取る。

四二、捏手（こねて）

御劔神楽に用ひられる手振であります。

転突の始りの左足を後に引き直に右足を一つたゞく時、右手の太刀を左方に倒し、左手に刀身の切先から一、二寸の部を握り、之を平に胸高に支へ(右手は束を握つたま) 転突して前進し、其の第一後退にうつる。即ち右足を後に引く時、右手握れるまゝの束を右足近くに下げ全時に左手自ら少しく上る。次に左足を後に引く時、左手の握れるまゝの切先を左足に近く下げ、右手自ら少しく上る。次に右足を後に引く時、右手の握れるまゝの束を右足近くに下げ全時に左手自ら少しく上る。次に左足を後に引く時、左手の握れるまゝの切先を左足に近く下げ、右手自ら少しく上る。次に太刀を胸高平に支へて転突前進する手振であります。

四三、逆振(さかふり)

御劔神楽の中、捏手の次に来る手振であります。

先づ捏手に於て右手束、左手刀身を握つたまゝ刀を平に支へ持ち、足は転突して進み、やがて後退の右足を引く時に右手に握つて居る束を放ちて刃を握つて居る左手で刃を逆さに左方に(左上より左側に振下げ) 振廻はす。而して次に後退の左足を引く時に束を逆さに右方に(左側上に振上げた束が右前から右側下) 振廻す。此の如く又右足後退して逆太刀を左に振廻はし又左足後退して逆太刀を右に振廻はし後、転突前進となりますが、其の転突前進の場合は先づ右足が出て一たゞきする時逆さの太刀は右に振廻はされ、次に右足第一の二たゞきの時、逆太刀は左に振廻はされ、右足第二たゞきする時、逆さの太刀は右に振廻され、そして転突終りの右足一步後退には、再び逆さの太刀が左に振廻される事になるのであります。

四四、押廻(おしまはし)

押廻は各番神楽中に含まれて居る手振でありまして、右押廻しと左押廻しとがあります。

左足から踏みはじめ大きく右方に輪を描く如く押廻すのを右押廻しと称し、全じく左足からはじめて大きく左方に押廻すのが左押まはしと称します。そして拍子に足を合せて押廻す場合と、拍子に構はず押廻しする場合とあります。

四五、引手、引かれ手（ひきて、ひかれて）

舞手の地位に附する称へで、即ち四人舞の場合は一郎、三郎を引手といひ、二郎と四郎とを引かれ手といひます。二人舞の場合は一郎が引手、二郎が引かれ手であります。而して引手は比較的上達者が其の地位につく慣しになつて居り、神遊神楽は翁が引手、嬬が引かれ手であります。

四六、鈴の小拝（すずのせうはい）

右足の前に出たのを後に引くと全時に右手鈴、左手採物を持つたまま前に下し、上体を前方に少しく屈めて一拝し、起き直りて鈴を一振する手振でありまして、鈴の拝の（二）の簡単になつた動作であります。

四七、押廻の印（おしまはしのいん）

御綱神楽、前上段中にある手振でありまして、左手の印右手の印と両様あります。即ち食指と中指とを睨へて伸ばし、拇指と無名指、小指とを突合せて左右押廻しの時に用ひられます。



四八、両手甲合せの印（りょうてこうあはせのいん）

之も御綱上段中の手振で、左手食指と右手食指と及び左手小指と右手小指とを互に手甲が合ふ様に組み、左手は上に拇指と中指無名指が突合ふ様に接触せしめ、右手は下に全しく拇指と無名指中指とが接触する様に突合せて組む印であります。



四九、組手の印（くみてのいん）



御綱前上段の終りに於て黙念の印であります。上図の如く右上手、左手下に組合せの印で『袂へ給へ浄め給へ』と約五秒間右膝突の姿勢で黙念します。

五〇、結手（むすびて）

平楽各番及び織居、御劍、御綱神楽等舞納めの段の手振であります。

右各神楽下段を舞了つて正面し、先づ鈴を採り、適宜の位置に退歩して転突し、次に右五足廻り、次に左五足まはり、次に鈴の拝後、右足を一步後に引くと共に、鈴を右高く一振して了ります。

本手神楽の手振次第（括弧内の符号は神楽用語の解説番号）

○第一番。神開（かうびらき）四人舞

（い）意趣

神開きの意で最初に舞はれる。

（ろ）典辞

楽長先づ『本手神開仕へまつる』と告ぐ。楽員一同『唯』と称する。但し二方舞又三方舞の場合は『本手二方舞』又『本手三方舞』仕へまつるの如く告げる。

（は）出立

立烏帽子（略帽）、白衣、狩衣、差袴、白足袋、笏等揃の装束を要する。

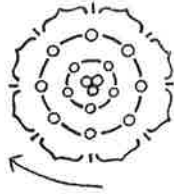
(に) 採物

右手鈴、左手舞扇。

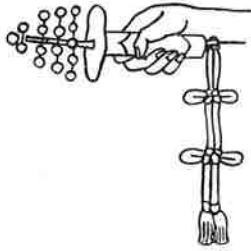
(ほ) 前作法

笏を持ち一揖して、舞手扣座を立出で、一郎、二郎、三郎、四郎と順次に舞座に進み、跪居一揖の後、三郎、四郎は一郎、二郎の間に進み、四人全時に笏を案上に置き、鈴及扇を採りて各舞座の位置に復し、右膝突にて図の如く採物を持つて構へ居る。

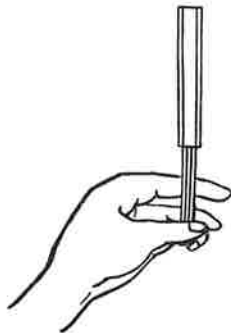
鈴の振様



鈴持方



扇の持方



(へ) 初順逆(解一)。扇はたゝんだまま。

鈴一振して起上り、正面鈴の拝(解二)、右押廻はし(順廻り)(解四四)、此の間鈴を右高に三度振る。次に正面鈴の拝(解二)一度。左押廻はし(逆まはり)(解四四)此の間も鈴右高に三度振る。次に斜向合鈴の拝一度(解三二)。次に右五足廻り(解六)して、正面鈴の拝一度(解二)。

(と) 上段正面舞(解一〇)。上段はすべて鈴を振る。扇はたゝんだま。

先づ左足を一步踏み出し、次に振捌(解三)。徒足左右一回(解四)。三足進右左右(解五)。左五足廻り左右左右左(解

六)。転突(解七)。次に右五足廻り(解六)にて右面舞にうつる。

(ち) 上段右面舞(解一九)。

手振正面舞に全じ。了つて右五足廻りにて(解六)背面舞となる(解一〇)。

(り) 上段背面舞(解一〇)。

手振正面舞に全じ。了つて五足廻りにて(解六)左面舞にうつる。

(ぬ) 上段左面舞(解一九)。

手振正面舞に全じ。了つて右五足廻りで正面となり、中順逆にうつる。

(る) 中順逆(解一)。中順逆中は、鈴の拝以外は大体鈴は振らない。

正面鈴の拝(解二)。右押廻し(順廻り)(解四四)。此間落ついてまはる。次に四隅向合、鈴の拝一度(解一八五)。次に

右五足廻りして(解六)正面鈴の拝一度(解二)。次に扇を開き中段にうつる。

(を) 中段正面舞(解一〇)。中段中は大体鈴を指らない。

三足進左右左(解五)。鈴の小拝(解四六)。横転突(解一二)。了つて鈴一振。徒足左(解四)。三足進右左右(解五)

。左式足廻り左右左(解六)。して背面して右足を一たつき全後に鈴一振小拝(解四六)。徒足右(解四)。転突(解

七)。左右二足に開き向合となる(解一八)此時鈴一振。右押廻し(解四四)にて右面舞にうつる。

(わ) 中段面右舞(解一九)。

鈴の小拝(解四六)一度にはじまり其他も正面舞に全じく、了つて右押廻し(解四四)左面舞にうつる。

(か) 中段左面舞(解一九)。

鈴の小拝一度(解四六)に始まり其他正面舞に全じく、右押廻しにて(解四四)正面し下段にうつる。

(よ) 下段正面舞(解一〇)之から鈴を振る。各番全断。扇は開いたまゝ。

鈴の小拝（解四六）にはじまり其他は上段正面舞の手振に全しく了つて右面舞にうつる。

（た）下段右面舞（一九）。扇全断。

鈴の小拝はない。上段正面舞に準ずる。了つて背面舞となる。

（れ）下段背面舞（二〇）。扇全断。

上段背面舞に準ずる。鈴の小拝はない。了つて左面舞にうつる。

（そ）下段左面舞（一九）。扇全断。

上段左面舞に準ずる。了つて正面して追廻し結手となる。

（つ）追廻結手（解一六）。

追廻結手も扇は開いたまゝで、鈴も下段から続いて振る。

手振の用語解説（一六）の通りに舞ふ。但し順追廻しの間は左手の扇は振り廻さないで、逆追廻しに入つて扇をひるがへし舞ふ。結手に入つても順右廻りの時は扇をふらず、逆左廻りの時にひるがへし振りて舞ふ。

（ね）備考

大体各番神楽に於て四方舞の場合は上段、下段が四方面に舞はれ、中段が三方面舞となる。又三方舞と称せられる場合は上下段が三方舞（正面舞、右面舞）であつて、中段が二方舞（正面舞）となる。而して又二方舞と称せられる場合は、上下段が二方舞、中段も亦二方舞（何れも正面舞、背面舞）に舞はれる定めであり、尚二人舞で追廻しのつく神楽は両隅追廻になる（解一六）
（な）後作法。

鈴、扇を案上におき、笏を採つて各舞座につきて跪居一揖。次に四郎、三郎、二郎、一郎の順に扣座に入り、膝回転して着座、一揖して神開を了る。

（以下次号）